



# ICT 海外ボランティア会会報 No. 97

2021年3月1日(月)

URL: <https://ictov.jimdo.com>

EML: [info.ictov@network.email.ne.jp](mailto:info.ictov@network.email.ne.jp)

## 目次

### ◆特別寄稿

[発展途上国に寄与する日本の底力](#)

当会顧問 [加藤 隆氏](#)

### ◆特別寄稿

[徒然日記\(13\)](#)

当会特別顧問 [石井 孝氏](#)

### ◆海外グラフィティ

[「頭のよさとは『説明力』だ」を読んで  
粹\(いき\)と野暮\(やぼ\)](#)

[日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智氏](#)

### ◆海外便り

[南イタリア俳柳紀行\(最終回\)](#)

[元 JICA シニア海外ボランティア 北垣 勝之氏](#)

### ◆第6回 ICT 海外情報ウェブサロン模様

[事務局](#)

### 発展途上国に寄与する日本の底力

当会顧問 加藤 隆



初めに外務省によるアセアン 10 カ国で実施した日本に関する世論調査の結果を紹介しよう。これには長年に亘る日本の官民が一体となった技術・経済協力、投資、人材育成等の貢献が高く評価されている（2018年実施、各国男女 300名）。即ち、「この 50 年にアセアンの発展に貢献した国は？」の問いに対して、日本は断然トップの 65%を占め、次いで中国（47%）、米国（35%）が続く。更に「やや」を含めて、日本と友好関係にある（87%）、日本は信頼できる（84%）、日本は世界経済の安定と発展に重要な役割を果たしている（83%）との評価を得ていて、何とも誇らしい。

ここで電気通信・情報通信分野の技術協力について幾分深掘りしてみよう。日本政府の ODA(政府開発援助)による援助理念にも変遷がある。1957年、「わが国の国益」を考へての供与という理念を打ち出した。70年代になると、日本の ODA は日本企業の利益誘導との批判があり、「相互依存」が加味された。80年代には、「人道的・道義的考慮」との理念を付け加えられ、1992年には ODA 大綱で、「人道的考慮、相互依存、環境の保全、自助努力」の 4項目が掲げられた。時代の推移と共に日本を取り巻く情勢を勘案し設定されている。

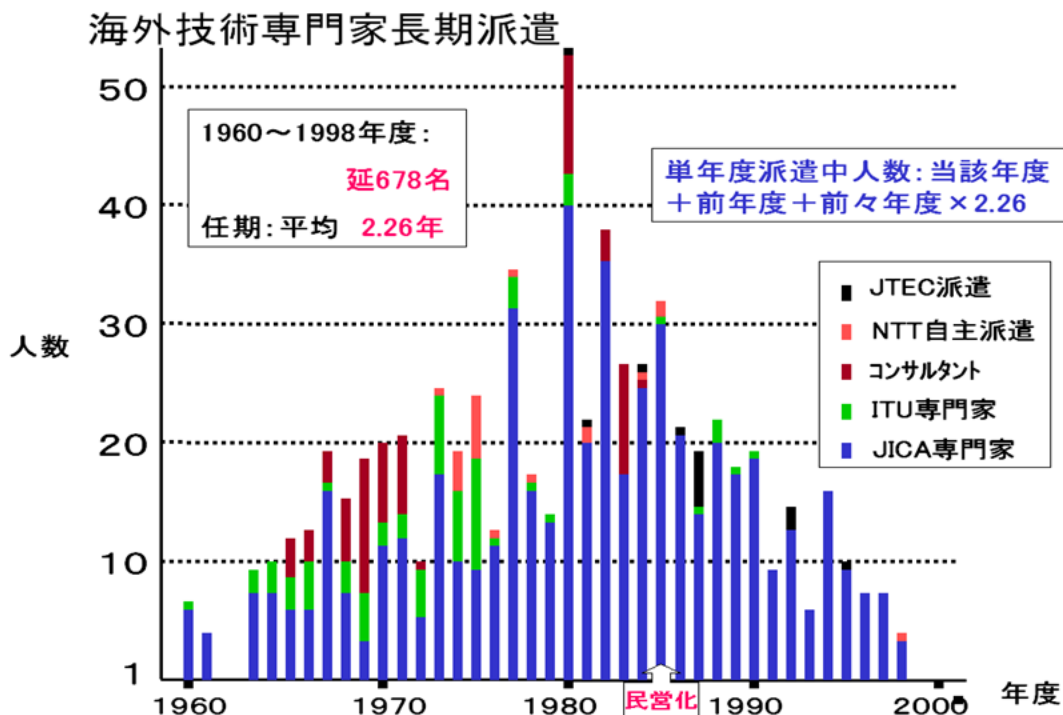
具体的には、1950～60年代に戦後賠償の一環として、ビルマ、フィリピン、インドネシア、ベトナムとの間に賠償協定が締結され、また戦後処理の一環として、カンボジア、ラオス、マレーシア、シンガポール、韓国、モンゴル、ミクロネシアに対して無償援助等が行われた。そして 1970年代にかけて、OECD や JICA 設立等援助体制が確立し、有償資金がタイドで供与され、日本企業の輸出振興にもつながり、高度経済成長にも貢献した。1980～90年代には、日本は供与額世界 1 位へ上り、政府は ODA を国際貢献の重要な柱の一つとしてアピールした。また BHN (Basic Human Needs) 関係の援助を拡大した。そして 1998年 ODA 予算が減少し、量的拡大が望めなくなる中、質的充実が求められた。更に 2014年には「非軍事的協力による平和と繁栄への貢献」「人間の安全保障の推進」および「自助努力支援と日本の経験と知見を踏まえた対話・協働による自立的発展に向けた努力」を掲げている。

それに呼応して、電電公社（当時）も海外技術協力に尽力した。この協力活動分野は大きく三分野がある。その一つが海外からの研修生受け入れで、1955年～95年までに、年間約 50 カ国から約 150 名を受け入れ、累計で約 120 カ国から約 6,000 名に及んだ。

次に海外技術専門家长期派遣である。長期とは 2 年以上を指す。そして 1960年～98年には電電からの派遣者数は延べ 678 名に達する。内訳は JICA 専門家 504 名、ITU 専門家 65 名、コンサルタント 69 名、その他 NTT 自主専門家、JTEC 等である。その模様を下図に示す。図中の人数は当該年の新規派遣者数であり、任期の平均は 2.26 年なので、実際稼働した専門家数は図の人数の倍以上である。このほかにも任期 2 年未満の短期専門家は多数派遣されている。JICA の派遣先に関しては 46 カ国に及び、アジア・大洋州が 40%以上を占め、タイが最も多く（65 名）、インドネシア、パキスタンが続いている。

そして最後が青年海外協力隊への参加支援であり、1966年から 2010 年にかけて 49 カ国に対し 490 名に及んでいる。派遣者は当初技術専門家と同様に人事異動により派遣さ

れたが、その後個人の意思により JICA の募集に応募している。そして現在も少人数ではあるが続いている。派遣先は中近東・アフリカが多く、約半数を占め、アジア・大洋州、中南米、東欧の順である。



私は電電公社バンコック事務所勤務時代には、アジア・オセアニアで活躍された技術専門家や青年協力隊員と協調した。これら多年に亘って活躍した多くの方々は貴重な海外人材であり、その後の NTT 海外業務やビジネスの中核として活躍し、また現在も活躍していることは言を俟たない。また政府の方針として、現在海外技術専門家に代わって、シニア海外ボランティアの制度になり、NTT の OB にもその経験者がおり、私も 2 年間タイで参加した。そして 2008 年経験者が核となり本「ICT 海外ボランティア会」が発足し現在に至っている。

現在地球上のどの国もコロナ禍に悩まされている。このような障害があっても、海外技術協力の理念は変わるものではない。しかしその実施に当たっては種々の工夫が必要であろう。現在 JICA によるシニア海外ボランティアと青年海外協力隊の制度は「JICA 海外協力隊」に一体化された。そしてコロナ禍のため、全員が一時帰国を余儀なくされた。今こそ海外技術協力の仕方に工夫を凝らす時であろう。事実、JICA は技能実習生を送り出す途上国と日本が共に繁栄する道筋を見出すフォーラムを準備している。

更には例えばオンラインで途上国に対し技術協力が行えるよう、日本と派遣国を結ぶセキュリティが保障されるオンラインネットワークを構築し提供したり、また途上国での海外ビジネス時に技術協力（技術移転、人材育成等）的要素をタグして行うことも有効かも知れない。それが次の世代のビジネスにも繋がると考えられる。

「二元性一原論」なる言葉がある。これは現在のような困難から脱却し、次なる飛躍に向けたもので、「車はブレーキ無しで、アクセルだけでは上手に走れない。陽陰両者の融合が不可欠」との考えである。この場合のアクセルは、各国独自の産業推進プロジェクト、文化・伝統・自然・産業・おもてなしの精神等であろう。（了）

## 徒然日記(13)

当会特別顧問 石井 孝

### 「メンテナンスと組織改革」

嘗て勤めていた会社では、何か新しい事を始めるに当たっては、そのための新組織を創るという事が常であった。

そして、組織を創ると、何か全て終わったと言った感じになってしまう。しかし、実際はこの組織が目的通り機能するかどうか重要なポイントであるのに。

大抵の場合は、然るべき人事配置が為されるので、スタート当初はまずまず順調に事が運ばれる。

しかしながら、放っておくと、事、志した方向とは全く別の、とんでもない方向に走ってしまう事態が往々にして起こる。時代にそぐわなくなるケースもある。

組織を発足させた当時とは、代も人も変わり、当初の目的は、何時の間にか風化してしまうのである。

改革などと言うと何か勇ましい感じになるが、経営トップは、こういった事象・事態を丁寧にチェックし、各組織が常に然るべき方向に作動するよう適切なメンテを心掛けることが、先ずもって必要ではないか。

こういう意味では、トップは常に現場の実情を的確に把握しなければならない。

組織は生き物である。親が子供を育てるような心掛けで、トップは自分の組織を育てなければならないのである。



### 「ソフトウェアシステムは生き物」

先に、会社組織は生き物である、という投稿をさせて頂いた。実は、ソフトウェアシステムについても全く同様な事が言える。

莫大な金を掛けて創ったシステムもメンテを疎かにして置くと、とんでもない事故が起こる。改めて事例を挙げる事も無いであろう。

いったんシステム開発を終え、ソフトウェアを使い始めると、次々に機能追加や修正作業が発生する。この作業を続けていくと便利になる一方で、ソフトウェアはいつの間にか増殖し、気がつくソフトウェアが会社経営（国の場合は国家行政）すべてを支配してしまい、それなしでは仕事ができない状態になってしまう。従って、システムは、秩序ある成長ができるように管理することが肝要なのである。最初の開発は手始めに過ぎず、使い出してからが本番なのである。ソフトウェアシステムも会社の組織と同じように、丁寧なメンテを必要とする、強烈な生き物である事を十分認識して欲しい。

現在、政府が進めて居る行政システムのデジタル化（ソフトウェアシステム化）は大変結構な事である。老婆心ながらお願いしたい事は、ソフトウェアシステムと言うものは上手に育てる事が何をおいても重要である事を念頭に置いて、メンテナンスを基軸にした開発体制を構築して欲しいという事である。実を言うと、連続投稿の本意はこれを言いたかったのである。

## 「困った」

JICA のシニア海外ボランティアでお仲間であった、ハンセン氏病専門の医学博士の方から、今、NTT で進めている「IOWN」とは何か、素人に分るよう、例え話で教えてくれと、メールが来た。

さー、「困った」。私は OB であるのに、古巣の「IOWN」解説記事を観てもサッパリ手が付かない。何方か、助けてください。

因みに、嘗て、同氏から「インターネットは既存の通信網とは如何違うのか、比喩的に説明せよ」と言われた。「運動場に喩えると、テニスはテニスコート、陸上競技は陸上競技場、野球は野球場でやっていたものを、巨大な運動場を拵えて、そこで、野球もテニスもランニングも一緒くたにやるようなものだ」と言うのと、「それでは、ランニング中に野球のボールにぶつかったりして危ないだろう」と言うので、「それどころじゃない、うっかりして居ると、レーサーまがいの暴走車が飛び込んできて大怪我する危険性もある」と言ったら、「分かったような、分からん話だが、感じはつかめた」と言われた。

## 再び「IOWN」

「IOWN」の世界を紹介した「IOWN で未来を描く NTT の研究者たち」という著書をサイバー創研の黒田様からご恵贈頂いた。

一通り眼を通して見たが、浦島太郎が竜宮城から持ち帰った「玉手箱」を一気にひっくり返したら、こんな感じなのかな、などと思ってしまった。率直に言って、眼が回るような感じであった。そして、浦島太郎が玉手箱を開けた時のように、自分も急に年を取ってしまったような感じがした。

「IOWN」の根っこの所（本質）は、どうもエレクトロニクスからフォトニクスへの完全な大転換にあるようである。

然らば、例えば音声（空気の物理的振動）をいきなり電子流ならぬ光子流に変復調するメカニズムとは、一体、どんな仕掛けになるのだろうか。

「IOWN」の実現によって社会生活は変化するであろうが、「IOWN」の基本的テーマは、社会科学ではなく科学技術であろう。執筆された新進気鋭の技術者の方々には、先ずもって、革新的技術の基本となるプリンシプルと、これを実現するためのテクノロジーのメカニズムについて分かり易く丁寧な解説をして欲しいと思ったが。

## 「世界と日本」

高校数学を復習して思う事は西洋の凄さと日本の頑張りである。

現在、我々凡人がフーフーいって、一生懸命に鉛筆をなめている「積分」、これは、既に 1800 年代の中盤にリーマンによって築き上げられた優美な体系である。当時の日本と言えば「安政の大獄」に象徴されるような時代背景であった。つくづく西洋人の凄さと言うか西洋文明の奥深さを感じる。

日本は西洋に遅れる事半一世紀以上、明治維新以降、大車輪で日本は西洋文明に追いつき、現在では彼等を凌駕するアウトプット（例えばノーベル賞受賞実績など）を出している。これもまた、物凄い頑張りではないのか。

最近、何か日本は委縮しているように感じられてならない。マスコミなどは徒に祖国を貶めている。

我々ロートルはさっさと退去するから、若い人たちよ、テンピン麻雀も結構だが大志を抱いて欲しい。



### 「頭のよさとは『説明力』だ」を読んで

日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智



日本語の奥深さを教えてくれる斉藤孝が今度は「説明力」を解説している。自分にとって特に目新しいものは無いが、国際入札でのプレゼン、外資系投資銀行でのお客への説明、米国留学時の過酷なコミュニケーション授業、テレ朝ニュースステーションでの生出演、現在も同行営業での気づいたポイントなどをなにか自分に替わって解説してくれているような気がしてならない。

全編を解説せずに、思い当たった点の項目だけをまず列挙すれば、次のようになる。

- ① 9割の人は「説明力」を身につけていない
- ② 上手な説明の基本フォーマット
- ③ 説明では現物が最強の武器になる
- ④ A4 1枚の構成力で説明力は向上する
- ⑤ 「15秒練習」で説明話術が身につく
- ⑥ パーソナルな部分を見せるようにする

1. 説明力不足は、学校及び企業での訓練の無さが如実に出てしまっている。先生となる人物の不足である。例えば、外国人を相手に工場の概要を説明する工場長などに、時どき、上手なのがいます。外国人は情け容赦なく質問をする。その回答に窮しただけ経験を積んで磨かれていくのだ。
2. 国際入札での苦い経験はこうだ。入札結果が出て、落札したB Tのプレゼン資料をみて愕然とする。結論が先に出て、途中で説明、最後に再び結論。印象に残る。斎藤孝はこう説明する。①まず、一言で言うと〇〇です②つまり、詳しく言えば〇〇です③具体的に言うと〇〇です④まとめると〇〇です。これは、米国のビジネススクールで学んだものと全く同じだ。そもそもから始まって、結論はこうなりますという起承転結方式では無い。時々、会社説明に時間をかける営業がいるが、だれもそんなものに興味はないのだ。ずばり、核心を突くべきなのだ。
3. 日本地図作成者の伊能忠敬と長久保赤水の講演を時々するが、地図をズバリ出した方が分かりが良い。長久保赤水とは、忠敬の40年前に日本全図を作成した男であるが、ほとんど無名に近い。
4. A4枚にまとめる努力は昔からしている。実はパワーポイントは、スーッと頭に入るがまた、すーっと出て行って何も残らない。講演が無駄になる。聴衆に何か持って帰ってもらうという目的からは遠くなる。
5. 15秒で説明する。短い！しかし、無駄なことは一切話せず、肝心な部分だけを集約する訓練にはちょうど良い。テレ朝・ニュースステーションでの生出演で、時々、久米宏から、「田上さん、15秒でコメントしてください」と振られたことがある。ドキッとするが、テレビの時間はそもそも、勝負が短く、15秒でも非常に貴重だ。
6. 講演でも、自身の体験を挟むと聞いている人により訴える。(了)

## 粹（いき）と野暮（やぼ）

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智

サラリーマンで日本人とアメリカ人ほど野暮な人間はいない。日本人で言えば、カラオケとゴルフ、時にマーじゃん。アメリカ人は、アメフトとハンバーガーだ。昼間のビジネスも夜の会食も話題は仕事とメディアが発した事ばかりである。

講演の機会はあるが、ある年配の男性から「転職は35歳まで、仕事の話をしてほしかった」。何とも無味乾燥な指摘であった。講演の内容が「わが人生に一片の悔いなし」で、49歳で脱サラ、その後テレビのリポーター、投資銀行家、経営コンサルタントと転々と職を変えたが、そのたびに世界の価値観はがらりと変わった。それを面白がる人物も多々いて、特に女性の方がドキッとする感想を漏らすのが多い。ある時、サマセット・モームの「月と六ペンス」の話をしたら、講演後自分の方につかつかと歩いてきて「雨」の方がよりモームらしいと感想を語っていた。「月と六ペンス」はタヒチで没したゴーギャンをモデルにした作品で「月という夢を追う人間と六ペンスという日々の生活に追われる普通の庶民を対比させている」。この六ペンスという貨幣単位だが、三途の川を渡る船賃がたったの六文で安い娼婦の価値観を著している。「雨」は無神論者のモームのかなり重い作品で、禁を犯して自殺する神父の物語である。信仰とは何かという深遠なテーマを神父と娼婦という対照的な人物を浮き彫りにしたもので、読後、相当気分も滅入る。

「酒間公務を論ずるなかれ」とは、新入社員教育で教わったが、どうしてどうして、社会に出てみると、「酒間公務」ばかりである。中でも最も面白く無いのが、公務員と銀行員である。話題がまさに仕事とゴルフだけ。ましなのが、メディアの送り手の方で、受け手は無味乾燥。以前、先輩に紹介されて芸者遊びをしたが、その時、高名な芸妓の言葉が「粹と野暮」であった。小唄や民謡を口ずさむようだと、「粹な人ね」と褒められるが、三味に合わせて全く沈黙な人物が「野暮なお人」なのである。

なかにし礼が直木賞を受賞した作品が「長崎ぶらぶら節」だが、民謡によくある労働歌でなく、遊び人の歌である。以前隠岐の島出張の折、電話局長からシベリア抑留の話とこの「長崎ぶらぶら節」を初めて聞いた。それ以来、自分も気に入って謡っている。

アメリカ人や日本人と違って、ヨーロッパ人相手では趣味が無いと酒席は務まらない。ギリシャ政府の顧問をしていた時、相手の高官が、いきなり英雄・アレキサンダー大王の話を自慢げに語り始めた。「田上お前知っているか？」と問われたので、「それでは、アレキサンダーの汗はかぐわしい香水の香りがしたという伝説はご存知か？」と逆襲した。これには、相手がぎゃふんとなった。このエピソードは子供の時母親から買ってもらった絵本の中に載っていた話で、その後、プルタークの「英雄伝」を読んで改めて確認した次第である。英雄伝は、ギリシャ・ローマの英雄たちの逸話の列挙だが、アレキサンダー大王とシーザーに相当な部分を割いている。ヨーロッパ理解には格好の書物である。(完)

### 南イタリア俳柳紀行(最終回)

元 JICA シニアボランティア  
北垣 勝之

ヴィールスよりヴィーナス愛でたイタリアに

<sup>かね</sup>金 落せ菌は落すなアジア人

イタリアの地勢は日本と似ている。山あり谷あり島嶼あり、北のフランス・スイス・オーストリア・スロヴェニア国境から、西のリグリア海・ティレニア海、南のイオニア海、東のアドリア海へと三方は海に囲まれ、険しい山岳地帯がある一方平地は少ない。その少ない適地を利用してブドウ栽培や酪農、営農を行う。火山噴火や地震の災害も多発する。そんなアジアとは遠く離れた南欧の国にどうしてコロナウイルスが入り込んだのだろう。今や地球上の交流は、距離の遠近を問わず複雑に入り組みグローバル化は進む。中国人観光客だけでなく中国へ商用で出かけるイタリア人も多い。北部ロンバルディア州で最初の感染者が出たというニュースを知ったのは、実は旅行中の1月末だった。私たちの旅は南部、せいぜいローマが北限である。確かにローマでは比較的中国人が多く、宿泊したホテルでもかなり見かけた。中国本土でのコロナウイルス蔓延のニュースを聞いても、まだ実感としてはピンと来なかった。中伊交流の歴史は日伊のそれより古い。シルクロード交易の昔から数々の物品が両国間を往来した。中世にはヴェニス商人の東方貿易もある。マルコポーロの東方見聞録はその頃の事情を伝える。さらに2世紀を経ると北京で没したマテオ・リッチ(イエズス会士)の布教活動もあった。そして中伊の絆は深まり今日では中国での事業に係わるイタリア人も多い。彼等が春節休暇に一時帰国することもあり得よう。中には保菌者がいるかもしれない。伝染は中国人観光客からかイタリア人によるものか定かではない。イタリアにはローマ時代からの遺跡が多数ありユネスコ登録遺産の数はトップクラスだ。さらにファッションやスポーツ等のイベントも盛んである。年間を通じ世界中から人々を呼び込み、国家財政に占める観光収入の割合は大きい。コロナ菌は要らない、欲しいのは菌ではなく金である。しかし欧州諸国の中で真っ先に中国からの「貰い火」が大火となり呻吟する羽目になった。

#### 打上げはイタリア統一エマヌエーレ

旅の打上げは俗称ヴィットリアーノ「ヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂」の見学である。ローマのランドマークみたいな存在でありローマ観光はここから始まるのが一般的、それが最後になってしまった。朝一番で出向くも未だ開門していない。東京から来た一人旅の熟年男性と出会う。彼は27年振りの再訪で何か変わったことがないかと興味津々、「毎月第一日曜日はサンピエトロ寺院など主たる施設は入場料が只になるはずだ」と言う。「それは好いことを聞いた、もう少し後でまた来ましょう」と挨拶を交わして別れる。前日一部見残したフォロロマーノの復習や近辺を散策して再びヴィットリアーノへ、一階部分の狭い入口から中に入ると、そこはイタリア軍事博物館になっていた。大理石の荘厳な建物、2、3階へと陸海空軍の遺品が陳列されている。帽子を被ったまま閲覧していたら係員から脱いでくれと注意される。ここは1861年3月17日イタリア王国を樹立したサルデーニャ王エマヌエーレ2世を祀る聖堂なのだ。失礼ついでに日伊修好通商条約締結(1866)、日独伊防共協定(1937)の話に係員に投げ掛け返礼とした。ともあれイタリア共和国の成立は、当時のベニート・ムッソリーニ首相率いるファシスト党



が崩壊し連合軍側に靡いた戦後(1946)になる。聖堂から一旦外に出て裏手に回るとエレベータがある。折よく空いている。高さ 80m の屋上まで一気に登ると、そこは 360 度の別世界、ローマ市街が一望に広がる。近くは足下に人が蠢くヴェニス広場、昨日訪れたコロッセオやコンスタンティヌス帝の凱旋門、遙か北西方向に目を転じればヴァティカン市国のサン・ピエトロ大聖堂まではっきり見える。天気晴朗、壮観な絶景を丸々無料で堪能して最高のローマを後にする。



朝一番のヴィットリーノ(エマニエル 2 世像前)

コンスタンティヌス帝の凱旋門

エマヌエル 2 世記念堂屋上

ヴェネチア広場に群がる人と車

### イタリアに菌もて追わる旅せわし ゴビ砂漠機上の小便慈雨となれ 中東の火種も消さん我が放水

いつも行き帰りのフライトが何処を通るか興味がある。行きの成田・ドーハ間は日本海沿いに韓国を横断、北京からゴビ砂漠、アマルティを抜けてイランのシラスへと通常のルート、帰りのドーハ・成田間は珍しく南回りでアーメダバードから、ムンバイ、コルカタとインドを横断して中国の昆明、貴陽、合肥、上海へと抜け、済州島を経て日本へ。他方ドーハ・ローマ間は往復ともほぼ同じクウェート、イラク、シリアと地中海上のコースである。問題の多い地域を通るたびにいろいろ思いが巡る。中国からの偏西風に乗ってコロナ菌が日本に飛んでくるのを抑えられないものか。私にできることと言えば、小便でも振り注ぎ黄土に湿り気を与えるくらいか。それも良し、またペルシャ湾辺りでは同様にきな臭い火種に小水を振り掛け消し止めてやろう。狭い機内にじっと座っていたら、それこそエコノミー症候群に陥るだけだ。せめてトイレにせっせと通り歩き回るに如かず。ヴィールスにおののく下界の人間どもをデカンショ節で救済してやろう。雲上では天下睥睨、気宇壮大になる。御免！

### 今一つ形ばかりの機内食

元気だぜ喧嘩道中 <sup>めおとたび</sup>夫婦旅

老いぼれも旅に揉まれて若返り

旅行期間の短い美食自堕落の旅も終わりに近づいた。大言壮語の割には収穫はちよぼちよぼ、それでも無事に帰国できれば僥倖と感謝したい。食傷気味の疲れた身体をひっさげ機上の人になれば、そこでも飲食供与が待っている。サービスしてくれる人たちへの感謝の気持ちで更なる義理食い、人間試練の連続である。これこそ体力・健康診断のメルクマール、今後の行動指針を凶る貴重な機会になる。このところ家内同伴の旅行が増えた。私の足らざるところを彼女が補ってくれる。例えば視力、遠目は良いが手元の細かい文字の判読に彼女の目玉があれば有難い。お互い些細なことで口論が絶えない道中でも、加齢とともに唇歯輔車の領域が増えてくる。気遣いの多い伴侶でも旅は道づれ面従腹背で我慢しよう。かくして老老介護の夫婦旅、いつまで続くか分からないがお互い元気なうちは頑張りたいと思う。(完)

< 日程 >

1/26(Sun) QR807 NRT22:20→04:50DOH 機中泊

1/27(Mon) QR131 DOH08:45→12:55ROM(FCO) FCO 空港→ローマ・テルミニ駅(シャトルバス約 1 時間)、ホテルチェックイン後ローマ市内散策(駅近スーパーストア等)ローマ泊 (Madison Hotel)

1/28(Tue) Roma Termini08:05→12:04Bari Centrale (Frecciargento2 号車 15・16A)、バリーで私鉄 Sud-est 系バスに乗換えアルベロベッロ(Alberobello)へ(約 1.5 時間)、ホテルチェックイン後市内散策(旧市街、サンタントニオ教会、サンティ・メテイチ・コスマ・エ・タミアノ聖所記念堂、レストラン:アラトロで夕食)アルベロベッロ泊(Trulli Holiday Albergo Diffuso)

1/29(Wed) am.Alberobello(アルベロベッロ)からバスで一旦バリーに戻り、私鉄アップ・ロ・カーネ(FAL)でマテーラへ(約 1.5 時間)、BariCentrale11:30→13:00Matera、ホテルチェックイン後旧市街散策(トウモ、洞窟都市サッシ Caveoso 地区見学、夕食 etc.)マテーラ泊(Sextantio Le Grotte Della Civita)

1/30(Thu) am.洞窟都市サッシ Barisano 地区見学後タクシーでバス停(via Dou Luigi Sturzo)へ、マテーラ 11:40→16:30 ナポリ中央駅(MARINO バス)、地下鉄 Toledo 駅へ、ホテルチェックイン後ナポリ市内散策(スカッパ・ナポリ、晩飯は老舗タミケレのピザ)ナポリ泊(Grand Hotel Oriente)

1/31(Fri) 終日ナポリ市内・近郊探索(ケーブルカーでヴェオメロの丘、サンテルモ城・国立サンマルティノ美術館周辺散策、ナポリ中央駅からポンペイ・ミステリ駅往復(ポンペイ遺跡巡り)、ナポリに戻り夕食ピザ)ナポリ泊(Grand Hotel Oriente)

2/01(Sat) am.(fs)italo で Napoli Centrale09:35→10:45Roma Termini、ホテルチェックイン後ローマ市内散策(コロッセオ、パラティーノの丘、フォロロマーノ etc.)ローマ泊(Hotel Artemide)

2/02(Sun) am.ローマ市内散策(カンピットーリオ広場、ヴァイトリオ・エマヌエル 2 世記念堂 etc.)、pm.エアポートエクスプレスで空港へ Roma Termini12:05→12:35FCO(出発までラウンジで寛ぐ)、QR132 ROM (FCO)16:00→23:10DOH 機中泊

2/03(Mon) QR806 DOH01:55→NRT17:45、北総線で帰宅

< 費用 >

総額：304,829 円(二人分、以下単位¥)、(内訳：航空賃 143,100、ホテル代 93,545、交通費 38,760、飲食費 15,032、入場料・土産品等 14,920)、換算率：¥124/€、¥31/QAR(カタールリアル)

## ウェブサロンの話、あれこれ

### 第 6 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様

事務局

第 6 回 ICT 海外情報ウェブサロンが 2021 年 2 月 20 日(土)13 時 30 分～15 時 30 分、ウェブ会議室において開催された。テーマは「旅の思い出(その 2)」であり、冒頭、当会の宮村特別顧問(元駐ケニア日本国特命全権大使、元 NTT 常務取締役)から、ご挨拶及び乾杯のご発声があった。ご挨拶の内容は大略次のとおりであった。

- ・ ICT 海外ボランティア会(ICTOV)との関係は、現在の石井特別顧問と加藤顧問から、当会創設当時に依頼があり、それ以来、特別顧問を仰せつかっている。
- ・ NTT 在職時は当時の最高益を達成した反面、株価下落への対処に苦勞した。
- ・ ゴルフのエイジシュートに倣い、年齢と同数の国を訪問するというエイジカントリーを達成していたが、昨今の状況から、現在 74 歳で 73 か国となり、早く外国旅行できる状態に戻ってほしいと思っている。
- ・ 当会が今後とも未来に繋ぐよう祈念して乾杯！



続いて、当会の松田幹事が「北半球一周の旅の思い出」を紹介したことを皮切りに、加藤顧問による東北徒歩の旅、高橋様によるボルネオの旅のご紹介があり、堀尾様が準備されたプレゼンは時間切れ(持ち越し)となる活況であった。欧米からアジア(ボルネオ)、さらには日本(東北)までカバーした、ICT 海外ボランティア会(ICTOV)にふさわしい真に国際的な話題となった。その中で、加藤顧問のプレゼンは大略次のとおりであった。

- ・ 故郷の仙台と東京間を列車で何度往復したことか、その度に車窓から見える自然豊かな東北路をのんびりと何日もかけて歩いてみたいと思い、そして退職後、長年の念願の実現を思いたった。
- ・ 2008 年 5 月、上野－仙台間 300km の歩きを始めた。そしてその楽しみが身にしみて、さらに足を伸ばし、山形経由で新潟県に及んだ。その間、3.11 東日本大震災で大きな被害を蒙った太平洋沿岸や、戦時中疎開し終戦を迎えた寒河江(山形県)を訪れた。そして最近自宅(横浜市)より比較的近い八王子から甲州街道に沿いに松本まで歩いた。

その間 800km を超える。これは 13 年に亘る遅々とした旅ではあるが、いろんな意味で日本の美しさを再発見する良い機会でもあった。

・仙石線の東野（とうの）駅の残骸を見たときは涙が出る思いだった。駅舎は消え、ホームはかすかな土の盛り上がその痕跡を残すのみで、あの重い鉄の線路も枕木も全て流されていて、津波の恐ろしさを実感した。これらの駅はいずれ内陸の高台に移るのだそうだが、それにはあと 2～3 年は掛かるとのことで、街ぐるみの移動がなされるようだ。ホッとすることもあった。元田畑だった所に菜の花が一面に咲き、土手に手植えの草花が色鮮やかに花を咲かせていた。吊いの花かも知れない。侘しさも感じた。この辺には幼いころよく海水浴に来たところで感慨もひとしおである。被災された現地の方々は遅しく、復興への力強い歩みも確信した。

## 編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 97 号を発行することができました。今回は当会の加藤顧問から「発展途上国に寄与する日本の底力」のご寄稿をいただくとともに、徒然日記、海外グラフィティ、南イタリア俳柳紀行のご寄稿も継続していただき、誠にありがとうございます。南イタリア俳柳紀行は最終回になりましたが、これまで長期間にわたるご寄稿を感謝いたしますとともに、次回からは別の俳柳紀行をご寄稿いただけるとのことであり、楽しみにしております。

過日、当会運営会議メンバーにより当年度計画の振り返りや次年度計画について議論し、決定いたしました。「未来に繋げよう！」を基本方針とし、当会報の継続発行のほか、ウェブ会議室を活用し、全国・全世界から参加できる「ICT 海外情報ウェブサロン」につきましても継続する予定です。

当会及び当会報へのご感想、ご意見などございましたら、下記[サイト](#)にご記入いただければ幸いです。皆様からのさらなる会報へのご寄稿と ICT 海外情報ウェブサロンへのご参加をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

<https://ictov.jimdo.com/コメント/>

発行： ICT 海外ボランティア会(CTOV)  
会報担当： 空席のため募集中（編集長兼広報部長）、山川 博久(事務局長)  
ホームページ担当： 山崎 義行(報道部長)、安達 信男(幹事)